

Mandolin & Guitar Ensemble Bel Cuore

ベル・クオーレ

マンドリンコンサート No.35



日時／2017年5月13日(土) 開演 PM2:00(開場 PM1:30)

場所／浜離宮朝日ホール

主催 ベル・クオーレ

ご挨拶

本日はご多忙の中、ベル・クオーレの定期演奏会においでくださいまして、ありがとうございます。皆様方のご支援をいただきながら演奏活動を続けてまいりましたが、おかげさまで今回を持ちまして第35回の定期演奏会を、ここ浜離宮朝日ホールで迎えることができました。

これもひとえに皆様方のご支援の賜物と、団員一同御礼申し上げます。

本日のプログラムは35回演奏会にふさわしい多彩な作品を取り揃えております。1曲目はクラシカル・ファンタジーで、作曲は京都市立芸術大学作曲科教授のまえだしゅいち氏。まえだ氏がよせてくださった文にあるように、ゆるやかな導入部からアレグロの中間部、そして、またゆるやかな終結部へ—この緩急の差の面白さが聞きどころです。

続いて、当団でおなじみの佐藤洋志氏の編曲で3曲をお届けします。まずはヴィラ＝ロボスの代表作である「ブラジル風バッハ」から第9番、ブラジルの民俗音楽とバッハの作曲様式を見事に融合させた作品で、独特の民俗的なリズムが際立ちます。次はマーラーの交響曲第5番から「アダージェット」。イタリア映画『ベニスに死す』で一躍有名になり、その後の世界的なマーラーブームの火付け役となった情感あふれる曲です。当団では19回と24回定期演奏会に引き続き、3回目の演奏ですが、今回は佐藤氏の編曲による新バージョンでお届けします。そして、休憩をはさみ、イギリスを代表する作曲家エルガーによる「叙情的なセレナード」。エルガーらしい気品と親しみにあふれた小品です。

最後はフォーレの組曲「ドリー」。原曲はピアノ連弾のための6曲からなる組曲で、マンダリンの名手で編曲者・田辺健氏による編曲でお贈りします。ドリーとはフォーレが親しくしていたエンマ・バルダックの娘エレヌの愛称です。2、4曲目には子猫のイメージを感じさせるタイトルがつけられています。これは後に出版社がつけたものようですが、不思議と子猫がまどろんだり、はねまわっている様子を彷彿とさせます。

本日の演奏会にお集りくださいました皆様方に深く感謝申し上げるとともに、私たちの精一杯の演奏が皆様の心に響くことを祈ります。

ベル・クオーレ団員一同

ベル・クオーレでは演奏メンバーの募集を行なっております。
マンダリン合奏への参加をご希望の方は、井上 (03-3712-3819)
または bel.cuore.mail@gmail.comまでご連絡下さい。

プログラム

クラシカル・ファンタジー まえだしゆいち

ブラジル風バツハ第9番 H.Villa-Lobos
編曲 / 佐藤 洋志

交響曲第5番より第4楽章
アダージェット G.Mahler
編曲 / 佐藤 洋志

————— ・ 休 憩 ・ —————

叙情的なセレナード E.Elgar
編曲 / 佐藤 洋志

組曲「ドリー」 G.Fauré
編曲 / 田辺 健

第1曲 子守歌 (BERCEUSE)

第2曲 ミ・ア・ウ (MI-A-OU)

第3曲 ドリーの庭 (LE JARDIN DE DOLLY)

第4曲 キティー・ヴァルス (KITTY-VALSE)

第5曲 優しさ (TENDRESSE)

第6曲 スペインの踊り (LE PAS ESPAGNOL)



クラシカル・ファンタジー

まえだしゅいち

「クラシカル・ファンタジー」は第15回 JMJ (青少年音楽日本連合：通称「ジュネス」) コンサートのために作曲された曲で、1989年11月26日に昭和女子大学人見記念講堂で小出雄聖氏指揮による JMJ マンドリン・オーケストラにより初演が行われました。その後、1990年5月26日のベラ・クオーレ第8回演奏会及び2010年5月22日のベラ・クオーレ第28回演奏会で同じ小出雄聖氏指揮で再演されました。

今回の演奏に当たり、まえだしゅいち氏から以下のメッセージが寄せられました。

* * *

第15回 JMJ コンサート委嘱作品である序曲風なこの作品は、Fantastic な緩徐部とCapriccio的な速いAllegro部分からなる極めて対照的な2つの楽想により構成されている。

私にとってマンドリン・オーケストラのための第1作であったこの作品を通じて初めて体験したことは、マンドリンの何気無いトレモロによる持続音の対位的な絡みの表現豊かなことである。

弓による持続音の豊かさと異なり、その細やかな刻みは、もしヴァイオリンなどによる弦楽オーケストラで演奏されても、この新鮮味は体験できないと思う。

前田守一 (京都市立芸術大学作曲科教授)

ブラジル風バッハ第9番 H.Villa-Lobos 編曲/佐藤 洋志

エイトール・ヴィラ=ロボス(1887~1959)はブラジルの作曲家で、ラテン・アメリカを代表する作曲家としても知られ、その作品数は1000曲を優に超えます。

数多い作品の中で、「ブラジル風バッハ」は彼の代表作として知られており、1930年から45年までの間に9曲が作曲されました。各曲の楽器構成は室内楽から重厚な管弦楽まで多岐にわたり、楽曲構成も2楽章から4楽章まで変化がありますが、いずれの作品も「バッハ的(西洋風)であると同時にブラジルの(民俗的)である」という特徴を持っています。

今回取り上げる第9番ですが、元々は「ヴォカリーズ(歌詞のない母音合唱)のための無伴奏混声合唱」のために構想されたものです。しかし実際には、弦楽合奏による演奏が多くなっています。

曲はバッハ風に「プレリュード」と「フーガ」からなり、一続きに流れていきますが、特にフーガは5/11と6/11のフレーズからなる複雑なリズムを持ち、ヴィラ=ロボスの目指した「バッハ的であると同時にブラジルの」という思想を色濃く反映したものとなっています。

アダージェット

G.Mahler 編曲／佐藤 洋志

グスタフ・マーラー(1860～1911)は、交響曲および歌曲の作曲家としてよく知られています。その彼の交響曲のなかで1902年に作曲された第5番は、曲の調性が微妙に変化するうえに対位法が効果的に駆使され、非常に聴き映えがすること、音楽の進行が「暗い闇から明るい陽光へ」という伝統的な図式によるうえに、親しみやすい旋律が随所に見られるために、人気曲となっています。とりわけ、第4楽章アダージェットは、ルキノ・ヴィスコンティ監督による1971年の映画『ベニスに死す』(トーマス・マン原作)で使われ、有名となりました。この楽章はマーラーの妻アルマのために書かれたといわれています。

原曲はハープと弦楽器のみで演奏され、奥底に激しい感情を湛えつつも静謐感に満ちた美しい旋律で綴られています。

叙情的なセレナード

E.Elger 編曲／佐藤 洋志

イギリスを代表する作曲家の一人であるエドワード・エルガー(1857～1934)。彼の作品には2つの性格があるといわれています。

一つは「威風堂々」をはじめとする行進曲や、交響曲などの国威発揚的な作品で、多分に都会的で洗練されたイメージを持つ作品です。

もう一つは、彼が生まれ育ったイングランド中部ウスターの豊かな自然に触発されて作曲されたもので、「愛の挨拶」「弦楽のためのセレナード」「序奏とアレグロ」「エニグマ変奏曲」などがそれに当たります。今回の「叙情的なセレナード」は後者に属するもので、1899年に小編成のオーケストラのために書かれました。ABAの3部形式からなり、親しみやすい旋律が特徴となっていて、「普段着のエルガー」の姿が見えるようです。

あるいは、この2つの性格は、エルガー自身の葛藤の姿だったのかもしれない。

組曲「ドリー」

G.Fauré 編曲／田辺 健

この曲のタイトルとなっている「ドリー」とは、作曲者であるガブリエル・フォーレ(1845～1924)が親しくしていたエンマ・バルダック(後のドビュッシー夫人)の娘で1892年に生まれたエレヌの愛称です。エレヌの誕生日祝いに書かれた曲を中心に編まれたもので、1893年から97年の間に書かれました。いずれの曲もABAの3部形式となっています。

1898年にアルフレッド・コルトーとエドワール・リスラーの連弾によって初演され、翌年には初演者コルトーの手によるピアノ独奏版が、1906年にはアンリ・ラボーに

よる管弦楽編曲版が出版され、今日では原曲に加えて編曲版も有名になっています。いずれの曲も、フォーレ独特の和声進行とリズム感を持ち、ラヴェル「マ・メール・ロワ」などにも共通した「大人が童心を感じさせる曲」となっています。

なお、後年ドビュッシーが作曲したピアノ曲「子供の領分」は、彼とエンマ・バルダックの子のクロード・エンマ(シュウシュウ)のために書かれた曲で、この「ドリー」とは姉妹曲になるといえます。

◇第1曲 子守歌 (BERCEUSE)

この曲は単独でもよく演奏されます。ホ長調の穏やかな分散和音の上に優しい主題が歌われ、揺り籠にゆられる静謐な様子が漂います。

◇第2曲 ミ・ア・ウ (MI-A-OU)

元のタイトルは「メッシュュー・アウル(Messieu Aoull)」で、エレヌが兄ラウルを呼ぶ幼児言葉(本来はムッシュュー・ラウル)でしたが、出版社の勘違いでねこの鳴き声を示すこの名前になったといわれます。

へ長調のリズミカルなワルツで、あたかもねこが飛び回っているようにも見えます。

◇第3曲 ドリーの庭 (LE JARDIN DE DOLLY)

ホ長調の穏やかな曲で、フォーレ特有の巧みな転調が用いられています。緩やかに陽のそそぐ庭の雰囲気を与えているようです。

◇第4曲 キティー・ヴァルス (KITTY-VALSE)

元のタイトルは「ケティ・ヴァルス(Ketty Valse)」。ケティとは兄ラウルの飼犬です。「子猫のワルツ」に変えたのは、出版社にねこ好きがいたからでしょうか。

変ホ長調で穏やかに流れるワルツとなっており、リズミカルな第2曲とは好対照を成しています。

◇第5曲 優しさ (TENDRESSE)

変ニ長調。独特の和声進行から次第に高揚していく瞑想的な主題とその再現部が、輪唱(カノン)を含む中間部を挟んでいます。

◇第6曲 スペインの踊り (LE PAS ESPAGNOL)

へ長調。前の曲から打って変わって華やかさあふれる終曲となっており、スペインの明るい陽光を感じさせるものです。フォーレは自らの故郷である、明るいスペインの雰囲気を持ったフランス南部のことを思ったのかもしれませんが。

指揮者

小出 雄聖

大阪に生まれ、4歳よりピアノ、5歳よりヴァイオリンを始め、相愛学園子供のための音楽教室にて斎藤秀雄氏のもと同オーケストラコンサートマスターを務める。演奏家を目指して東京芸術大学付属高校を経て同大学を卒業するが、手の故障を契機に指揮活動を始め、セルジュ・チェリビダッケ氏のセッション、タングルウッドのサマーセッションにて研修、とくにチェリビダッケ氏からは多大な影響を受ける。

1996年に渡米し、マイケル・チャーリ氏のアシスタントを皮切りに、ボストン・ムジカ・ヴィヴァ、マネス・オーケストラ、ニューアムステルダム・シンフォニーを振る。翌年ニューヨーク・フィルハーモニック主催のマスタークラスにて指揮したシューマン、ブラームスをクルト・マズア氏が絶賛、「的確で創造性に富む指揮」と評され同氏アシスタントの一方、フィリップ・アントルモン氏の信頼を得て世界のオーケストラの指揮台に立つことになる。

アメリカではシンフォニエッタ・サファイヤ(1997~98シーズンから2000~01シーズンまで常任指揮者)をはじめ多数を指揮、またカリブ海のサント・ドミンゴ音楽祭にも招かれる。2001年よりヨーロッパへも活躍の場を広げ、オルケストラ・プロヴィンスィア・ディ・バーリ(イタリア)、ユトレヒト・カメロルケスト(オランダ)、フィラルモニカ・ブラショフ、フィラルモニカ・オルテナ、フィラルモニカ・プロイエシュティ、フィラルモニカ・トゥルグムレシュ、フィラルモニカ・タルゴヴィシュテ、フィラルモニカ・ラムニク・ヴァルチャ、フィラルモニカ・サトゥマーレ、フィラルモニカ・スイビウ(以上ルーマニア)に登場。

「雄聖!その精緻で深い音楽!」と賞され、ノヴァ・オーケストラ・トラスシルヴァーナ常任客演指揮者兼アーティスティックアドバイザーに任命され(2006~07シーズンより)、それを機にヨーロッパでのさらなる活躍が期待されている。

日本では京都市交響楽団、大阪センチュリー交響楽団、東京交響楽団、東京シティフィルハーモニック管弦楽団、広島交響楽団、群馬交響楽団を指揮。指揮法をエルヴィン・ボルン、カール・ピュンテ、久山恵子、山田一雄、マイケル・チャーリの各氏に、和声法・対位法を國越健司、池内友次郎、ロバート・クックソン、楽曲分析をカール・シャクター、作曲をディビッド・ローブの各氏に師事。

